

イチゴ栽培においては、中腰での収穫や管理作業等による労働負荷が大きい。また、収量を多くするため、育苗においてポット育苗を導入する農家が増加しているが、上部よりの手かん水管理であるため従来の無仮植育苗に比べてかん水に多くの時間を要している。

そこで、イチゴ栽培の省力化・軽作業化を図るため、底面給水方式による育苗と高設栽培の導入を推進した。

その結果、新たに18戸の農家が底面給水方式による育苗方式を導入し、19戸の農家に高設栽培が新規または増設で導入された。平成26年度末現在で、県全体のイチゴ高設栽培面積は10.7haに達した。

具体的な成果

- ①底面給水方式による育苗技術の普及
 - ・導入農家は18戸
 - ・育苗ポット数は約17万ポット
 - ・夏期のかん水に要す時間を大幅に削減
 - ・毎日かん水に費やしていた労働時間を他の栽培管理に使うことが実現



写真1. 手かん水 写真2. 底面給水方式による育苗

- ②高設栽培新規導入農家への重点技術指導

- ・新規又は増設で導入した農家は19戸
- ・平成24年度からの増加面積は約1.6ha

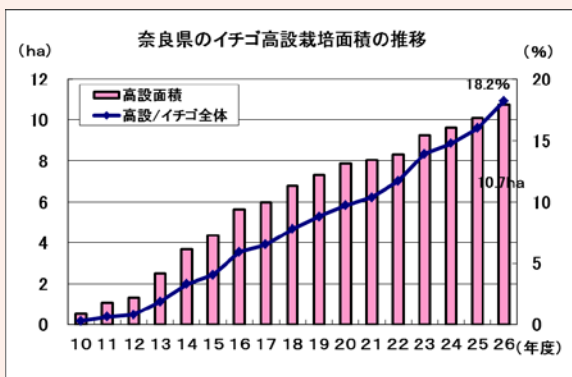


図1. 県内のイチゴ高設栽培面積の推移

普及指導員の活動

- 1、底面給水方式による育苗技術の普及 平成24～25年
 - 普及指導員の提案により、実証展示園を設置し、現地検討会や講習会を行い、普及推進を図った。
 - 平成24～26年
 - 育苗後半の葉柄部の窒素濃度、花芽分化初期及び病害の発生状況を調査し、底面給水方式による育苗の問題点を抽出し、問題解決のための指導を行った。
- 2、高設栽培新規導入農家への重点技術指導 平成24～26年
 - 設備導入時に技術内容や制度資金等について相談した。
 - 平成24～26年
 - 新規導入農家の早期技術習得に向け、栽培スケジュールや培養液管理等の栽培管理について重点的に現地指導を実施した(月1～2回)。

普及指導員だからできたこと

高度な専門技術を有し、生産者の問題点を把握できる普及指導員だからこそ、生産現場への技術導入を図るとともに、導入の際に生じる現場での問題に対応し、問題解決のための指導を行うことができた。

イチゴ栽培の軽作業化技術の推進

活動期間：平成24～26年度

1. 取組の背景

県内イチゴ栽培面積は、高齢化と担い手不足等により年々減少している。また、土耕栽培では、収穫や栽培管理の大半の作業を中腰姿勢で行うので、足腰の負担が大きい。更に、収量性を高めるためにポット育苗が増加しているが、上部よりの手かん水管理であるため、毎日かん水する必要があり、特に夏期高温期に多くの時間を要している。今後、新たな担い手を確保し定着を図るには、生産安定に加え、省力化・軽作業化技術の導入がかかせないと考える。

2. 活動内容（詳細）

①底面給水方式による育苗技術の普及

上部からの手かん水に要す時間の短縮を図るため、底面給水方式による育苗技術をポット育苗導入農家に提案し、実証展示圃に位置づけるとともに現地検討会等を実施した。また、育苗後半の葉柄部の窒素濃度、花芽分化初期及び病害の発生状況を調査し、底面給水方式による育苗の問題点を抽出し、問題解決のための指導を行った。更に、かん水作業の省力に有効であること、定植後の生育に悪影響があまりないこと等を確認し、生産者組織の講習会で紹介した。

②高設栽培新規導入農家への重点技術指導

新規就農者や土耕栽培で新たに高設栽培の導入を希望する生産農家に対して、高設栽培導入時に技術内容や制度資金等について相談を行った。導入後には、早期の技術習得に向け、栽培スケジュールや培養液管理等の栽培管理について重点的に現地指導を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

底面給水方式による育苗を3年間で18戸の農家が導入し、平成26年の育苗ポット数は約17万ポットであった。農家からの聞き取りから、底面給水方式による育苗の導入で、かん水に要する時間は上部からの手かん水に比べて大幅に短くなった。

また、高設栽培の面積は3年間で約1.6ha増加し、19戸の生産農家が新規または増設で導入した。平成26年度末における県内の高設栽培導入面積は約10.7haで、導入農家は80戸になった。



写真1. 手かん水



写真2. 底面給水方式による育苗

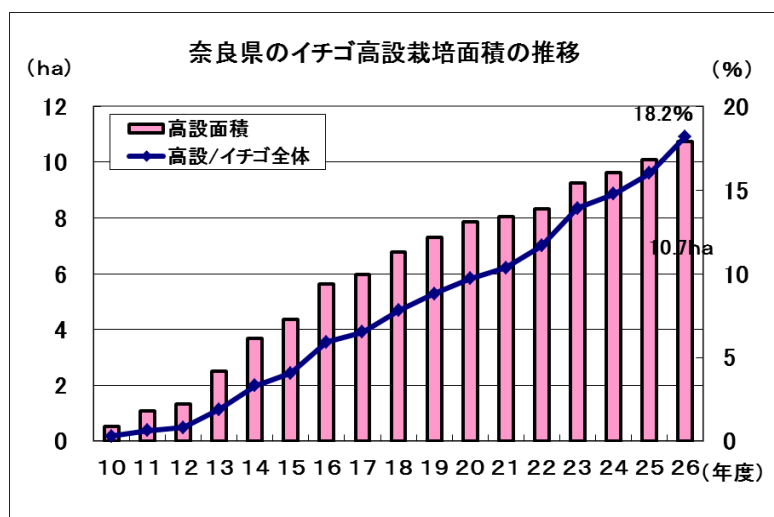


図1. 奈良県のイチゴ高設栽培

年度	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
新規就農	0	1	1	2	6	0	2	3	3	3	2	1	2	4	0	3	4
土耕栽培から	4	3	3	4	5	2	4	1	4	0	1	0	0	0	2	1	1
他品目から	0	1	0	3	0	1	0	0	1	0	4	1	0	2	0	0	0
増設	0	2	0	2	5	5	3	3	2	2	3	4	3	5	4	2	2
合計件数	4	7	4	11	16	8	9	7	10	5	10	6	5	11	6	6	7

表1. イチゴ高設栽培導入件数

4. 農家等からの評価・コメント（橿原市藤井氏、明日香村堀江氏）

夏期のかん水労力が大幅に削減でき、身体が楽になった。もう、手かん水に戻したくない。

高設栽培導入当初はいろいろと不安であったが、栽培管理や病虫害防除について普及指導員に相談することができて良かった。経費面に課題が残されるが、高設栽培を導入して良かった。

5. 普及指導員のコメント（農業研究開発センター・主査・小島巳奈）

今後もイチゴ栽培の軽作業化・省力化技術の推進による担い手の確保と育成が必要である。また、新規就農者に対して定期的に現地指導を行うことで早期の技術習得を図るとともに、経営を安定させることが必要である。

6. 現状・今後の展開等

今後も高齢化担い手不足等により、県内のイチゴ栽培面積の減少が続くと思われるが、イチゴは県内産野菜の中で最も収益性の高い品目である。今後のイチゴ栽培面積を維持していくためには、高設栽培等の軽作業化・省力化技術の導入について継続して支援を行う必要がある。